

Community 概念に関する覚え書

雀 部 猛 利

community という概念は古くから法哲学や政治哲学の中心的な課題であった。^(註1) 社会学においても **community** 概念は重要な基本的概念の一つとして考察されてきたが、今日では単に学問上の立場から **community** に関する概念が論じられているだけではなく、かなり広い階層の人びとの間においても既に日常生活における常識的な慣用語として使用されるようになってきた。しかしながら、それにも拘らず **community** という言葉ほど多義的な意味と用法をもつ言葉はない。^(註2) 元来 **community** という言葉が社会学上の用語として広く使用される以前においては、社会科学一般の常識語として使用されたもので、それは行政上の市町村などを意味する単純な概念として理解されていたに過ぎない。^(註3) その後 **community** の概念が社会学上の理論的、概念的な術語として使用されるようになったのは、恐らく1912年頃からだと言われている。すなわち MacIver の **community** 1917 の初版が世に出る少し以前であり、従って第一次大戦前アメリカの社会から構成されたものであったと看做して差支えないだろう。^(註4)

Sanderson によれば、**community** の概念は元来ラテン語から派生した言葉であると言われているが、それには数種の意味が含まれている。すなわち、
 (1) **community** という言葉は連帯性、あるいは共同性という性質を現わすために使用されている場合がある。たとえば A.W. Small は *General Sociology* 1905 p.582 のなかで *a quality of solidarity, or togetherness* という意味に使用している。また19世紀の中頃には **community** は *Communitic Society* の意味に使用され、*a Shaker Community*^(註5) とか、*the Onaida Community*^(註6) などという言葉が使用されていた。(2) **community** の第二の意味は、村落とか市区の如く、“一つの支えられた地域内における人

びとの一団 **a body of people**” という意味に使用されている。たとえば Murray A.H. の新英語辞典のなかで「ラテン語のこの言葉は単に **communis** (すなわち **fellowship** 諸関係、あるいは諸感情の共同を意味する) からの一つの名詞であったが、中世ラテンでは **universitas** の如く、仲間の一団あるいは **fellow townsmen** の意味に使用されていた」と説明されている。(3) **Community** の第三の意味は、第一の意味と第二の意味とが結合された概念で、地域によって限定された特定の集団 (**any group determined by locality**) に対して **community** という概念が適用されるようになった。たとえば MacIver は **community** のなかで「**community** によって、私は共同生活の特定の圏、村落、町、地区、国あるいはそれより一層広い圏でさえ意味する」と述べている。

(註1) Carl J. Friedrich: *The Concept of Community in the History of Political and Legal Philosophy* (Carl J. Friedrich ed.: *Community Liberal Arts Press, N.Y. 1959*) p.3

(註2) Arther Hillman: *Community Organization and Planning* MacMillen Co. N.Y. 1954 p.4
H.W. Beers: *The Rural Community*, in J.B. Gittler, *Review of Sociology*, 1957 p.193

(註3) *Encyclopedia of the Social Sciences*. by Edwin R.A. Seligman Vol.3

(註4) Sanderson は *The Rural Community—the natural history of a sociological group* 1932年の Chap. I *The Rural Community as a sociological group* の冒頭において“社会学上の集団としての **Community** は過去20年の間に展開された一概念である”と述べている。

(註5) Shaker 教は18世紀の中頃、英国の **Manchester** に起り、今も米国に残っているキリスト教の一派である。

(註6) 人間の完成には宗教的な救済が必要であり、そのためには特殊な社会組織に依らなければ不可能であると考えて、米国のニューヨーク州にあるオナイダに小さな共産的な団体が 1847年から 1880年まで設けられ、その団員たちを **Perfectionists** と呼んでいた。

community という概念は association の対概念として、MacIver によって社会類型論的に提示されて以来、社会学の基本的概念として広く取り入れられるようになった。すなわち彼によれば「community の基本的な指標は、人間の社会的諸関係のすべてがその内部で見出される」ところの地域性 (locality) と共同体感情 (community sentiment) に基づいている。従って community は人間の共同生活が行われている一定の地域であり、人間が共に住み、共に所属することによって、おのずから他の地域と区別されるような社会的特徴が現れてくる。そのみでなく、そこに住む人びとは人間生活全体にわたる関心をもち、従ってそこには共同体感情が生れてくるような社会である。つまり MacIver によれば「community の基礎は locality と community sentiment である」というのである。しかしながら community という概念は、もともと20世紀の初頭アメリカでは農村社会をどのように把握するかという行政上の実用的な問題として論じられるようになってから、提起された言葉である。William Harold Wilson (1892~) の如きは、community とは「取引きの中心地から馬車で日帰りできる距離内の地域」であると概念づけているし、あるいはまた Charles Josiah Galpin (1864~1947) の如きは、1912年に行ったように農村市街地図を作って services 機関の配置から、地図法によって生活圏としての community を見出そうとした。ところが1920年頃を境として、アメリカの農村にはかなり社会的な機能の変化が見られるようになった。すなわち生活水準の向上、交通通信の手段の発達などによる生活圏の拡大、外部社会との接触の増大などがそれである。そこで取引きの中心も多様化し、それに伴って取引圏を主な指標として community を把握してきた農村社会学の方法には疑問が生じてきた。そこで Sanderson は高等学校、郵便局、図書館などのような施設 (institution) が次第に田舎町に集中し、それが充実していくに伴って、田舎町と農場地域との間に施設を媒介としての結合 (association) や共同の関心 (common interest) ができることに着目し、それを community であると規定したのである。すなわち Sanderson は『真の community は、ある地域内の人びとと彼等の施設との間の結合の様式である。rural community とは地域集団である。それはある地理的な圏

内にいる人びとと施設によって構成されている。しかしどんな集団についてもいえるように真の **community** とは、彼等が多少なりとも彼等が行動を規制されるものとした、認められるような確固たる関係から成立している。それは一個の結合の形式であり、行動の様式であり、地域的な圈内にある人びとの間、施設との間の心理的相互作用である』(註1)として地理的側面と共に成員の相互作用、それによる心理的統一という二点から **community** を把握せんと試みたのである。

従ってアメリカではこれらの伝統を引きつぎ **community** を地域概念として理解する傾向が強く、(註2) ヨーロッパにおいて広く取り挙げられているところの **gemeinschaft** という協同体概念とはいささか異っている。MacIverによれば『**community** とは **village** とか **town** とか **district** とか **country** とか、あるいは更により広い地域での共同生活の範囲をいうのであり、それが **community** の名に値するのは、その地域がより広い地域からなんらかの意味で区別されなければならず、またその境域がなんらかの意味をもつように、その共同生活がなんらかの特徴をもたなければならない』(註3)のであるが、しかしこの地域概念としての **community** それ自体も、実体概念としては極めて曖昧な概念規定であって、ただ社会の類型的な理念型として **association** と対置させるときにのみ、その有効性を発揮してきたものである。

そこで理念型としての **community** 概念について若干の諸説を紹介すると、たとえば Henry Pratt Fairchild (1880～) は **community** の特徴として、自足性 (**self-sufficiency**) と **community** に個人を結びつける感情や態度の全体 (**totality of feeling and attitudes**) を挙げている。またヨーロッパの流れを汲む Rudolf Heberle (1896～) は **Kinship** にその特徴を求め、**community** の特徴は「その客観的な構造そのものではなく、その構造の存在に関する自覚とそれから生ずる権利や義務の認知」で構成づけられたものとしている。また Morris Ginsberg (1889～) の場合には、「Rule の共通の体系によって結びつけられたもの」を **community** の特色に求め、William Fielding Ogburn (1886～) と Meyer Francis Nimkoff (1904～) は『**Institution** の集合体』であると規定している。これらの見解はいずれも

community のもつ locality の特性を強調するだけでなく、community の特質をより明確にせんとして、他の要素をそれに附加したところの概念規定に過ぎない。換言すれば、community を単なる地域概念だけでは明確化することができないという難点に立たされたために、その活路を見出さんとして、附加的にその特性を求めんとしたのであった。事実 community 概念は農村共同体、都鄙共同体、国民共同体、国際共同体の如く、次第にその規模は拡大してゆくようになり、locality という地域性の限界を明確にすることが困難になったのである。

(註1) D. Sanderson & R.A. Polson: Rural Community Organization 1939 p.50

(註2) J.H. Kolb & E.S. Brunner: A Study of Rural Society 1940 pp.216. 218

(註3) R.M. MacIver: Community 1917 p.22

地域社会の概念は古くから社会学では community と呼称されてきているが、その内容は時代により、また人びとによって異なり、必ずしも一致した見解や統一された意見が存在していたとはいえない。19世紀においては、community の用語も村や田舎町を意味するものであり、それは専ら農村や農村的な地域社会を問題として取り挙げ、都市的な地域社会や巨大なメトロポリタンはその研究の対象から一応除外されていた。MacIver によれば community とは人間の共同生活が行われる一定の地域を意味し、しかも場合によっては国をも越えるような極めて広い地域にも適用しうるものであった。この規定は彼の初期の著作である community 1917 のなかで行われたものであるが、後期の著作である C.H. Page との共著 Society 1950 のなかでは、MacIver はこの地域性 (territorial area) の他に地域社会感情 (community sentiment) をも community の構成要件として挙げているが、community をば「人間の共同生活の行われる一定の地域」とする規定には終始変らないようである。しかし今日では都市的な地域社会も農村的な地域社会とともに重要な community の研究対象として取り挙げられるようになってきた。

E. S. Bogardus の *Sociology* 1934 によれば、community のなかには自然圏 (natural area)、近隣集団 (the neighborhood)、農村社会 (the rural community)、都市社会 (the urban community)、地方社会 (the regional community)、国民社会 (the national community) の六つの範疇が挙げられており、community の概念は農村や都市という範疇よりも更に拡大された包括的な概念として使用されている。また E. C. Olsen の *School and Community* 1947 に至っては community の範囲も更にまたより拡大され、次のような四つのレベルの分類がなされている。

1. 地区社会 (local community)

村、町、市、区、教区、郡

2. 地方社会 (regional community)

州、州の地域的群

3. 国民社会 (national community)

一つの全体として考えられた国家群

4. 国際社会 (international community)

密接な政治的、経済的また文化的紐帯によって連絡された国家群

それでは何故に地域社会の概念が時代の推移と共に拡大されて解釈されるようになったのであろうか。元来人間の社会生活は歴史的には自然的要件に著しく制約されながら、自然的な生活環境に順応してきたが、文化の発展と共に次第に自然的要件を克服し、生活環境のなかに社会的要件をより多く導入するようになり、その生活の領域が地域的に拡大されるようになってきた。すなわち、共同生活の範囲をどのように捉えるかという問題は、おのおのの社会が互に分散し、孤立し、そして封鎖的であった前近代社会の場合には比較的簡単であったが、近代社会の発展と共に共同生活の範囲も拡大せざるを得なくなってきた。MacIver 自身も「community とは程度の問題である」^(註1) ことを認め、「小さいものから大きいものへと進む段階的なものである」ことを指摘している。しかしその拡大が都市や農村を廃棄しないこと、それゆえ「今日ではわれわれのなかで一つの包括的な community に属しているものはいない。それはより近くの、更により広い多くの community へ同時に属しているの

である』(註2)

第一次的な基礎社会 (primary community) としての地域社会のもつ特質も人間の社会生活における充全性という点では、人口の増加と人間相互の接触範囲への拡大や全体における政治、経済、文化などの分化と中央集権化の過程において、これまでの範囲では community のもつその意味も稀薄化し、地域社会の限界範囲も拡大せざるを得なくなってきた。MacIver の基本的な立場は、社会の拡大と内部の分化こそ社会の進化であるとみているのであるから、ある特定の community の解体や解消という問題よりも、更に拡大された、分化した community による、より良い人間生活の実現という視野に立っている。MacIver によれば、共同生活圏は必ずしも「自給自足であることを要しないし、事実文明がより相互依存的になるに従って、そのようなことは次第次第に減少する」(註3) といわれている。かつて高田保馬教授が社会学概論(大正11年)のなかで、全体社会としての community は「一定の地域をもって限られ、自ら一集団をなすと意識し、また内部で殆んど一切の社会的結合関係を包括する社会」とであると指摘され、人間関係における「結合の網の錯綜せる総体」であることを定義づけられたが、E. C. Olsen のいう国民社会(national community)や国際社会(international community)という範囲にまで地域社会としての community を拡大していくならば、もはやそこには地域性という点からの統一的性格は次第に稀薄化していくことは否定できない事実となってくる。従って地域社会としての community の概念は、全体社会という充全的な community のなかで、地域的な共同生活を営みうる機能が特に強調されねばならないし、地域社会の住民の生活資源の共同利用という観点から捉えねばならない。E. C. Olsen は L. A. Cook の著書 The Meaning of Community 1939 より引用して、community とは①一定の人口の集合体であり、②一定の地域に住み、③一定の歴史をもち、④公共の施設を共有し、⑤なんらかの綜合意識によって連がり、⑥生活上の危機克服に対し、協同防衛の組織と力をもつ社会であると述べている。L. A. Cook によれば、community とは一定の文化を所有している一定地域に居住する特定の社会集団のことであり (a particular type of special group plus its

culture)、一定地域の住民をそのうちに包含し、かつある特殊な方式で機能するところの一つの生活活動圏をいうのである (an activity circle which embraces the inhabitants of an area and functions in a special manner)。更に具体的に定義するならば隣接した地域に住み、共通の経験によって結び合わされ、数かずの基本的な社会的奉仕機関をもち、その地方的合一性を自覚し、一個の団体として行動することのできる一定の人口集団である (a population aggregate, inhabiting a contiguous territory integrated through common experiences, possessing a number of basic service institutions, conscious of its local unity, and able to act in a corporate capacity)。それ故に彼をして言わしむるならば、community とは「一つの連続的地域に居住する人間の集団で、過去の経験を通じて結合されており、いくつかの基礎的なサービス制度をもち、その統一性を意識すると共に、突発的な生活危機の処理に協同して当りうるものでなければならない」ものである。アメリカにおいては、近隣社会 (neighborhood) や小地域社会 (small community) が社会福祉のための地域組織活動 (community organization for social welfare) を推進するに当り、最も重要な役割を演ずることが明らかになるにつれて、社会福祉事業における community として、このような小地域社会を代表せしめる傾向が次第に強調されてきた。ところが他方において都道府県、大都市の如き相当広汎な地域も社会福祉事業の行政単位として従来から利用されてきたことも看過しえない事実である。近隣社会 (neighborhood) におけるある特定の社会福祉問題をその近隣社会に存在する社会福祉資源だけで解決するにはおのずからそこに限度があるし、二つ以上の近隣社会における社会福祉事業活動を調整するためには、更に大きい地域社会の力にまたねばならない。しからば国家、都道府県、大都市の如きものが社会福祉事業における community を代表するものであろうか。社会福祉事業は本質的に community の住民の参加と支持の上のみ成立するものであるから、単に行政単位であるという理由で、行政区域を以て社会社会福祉事業の代表的な community とすることはできないのである。アメリカにおいても「ある種の問題はその性質上地方的 (local) なものであって、地方的な福祉対策行動

(local actions) に依って解決することができるものもある。しかしその他の問題は州の立法部、州政府の行政部門、あるいはその他の全州的規模をもつ機関 (state wide agency) に依って始めて解決することができるものもある。ところが更にまた別の問題になると、全国的な資源や能力を利用する以外には満足的な解決に到達することができない。」「このように community に関する各種の定義はそれぞれの用法をもっているが、社会事業家はそのうちの一つだけを取り出して、これを唯一の community と定義することはできない。すなわち社会事業家の考える community の概念は、彼の直面している問題の性格如何によって必然的に異らざるを得ない。かくして社会事業家の直面する community 理解に関する実践的な課題は、その needs の性質に応じて実質的な成果を挙げるためには、どのような地域的範囲の資源と住民の支持とが必要であるかにかかっている。つまり社会事業家の直面している問題を十分に解決しうるだけの人的、財的、物的、制度的資源と、それを動員しうる地域的範囲を、そのときの community と考えるのであって、それは問題に応じて時としては近隣社会であることもあれば、全国的地域にわたる場合も起りうるのである。』^(註4)

最近では社会福祉事業における地域社会は決して単純狭少な隣保社会という形のものでなく、一定の行政的地域にまで拡大されてきた。村や町においては、比較的明らかにこの地域性または地縁が共同社会的結合性の要件をなしているが、行政的地域としての市や府県の如き地域は必ずしもそうではない。殊に近代社会においては、資本主義経済機構のもとに資本と労働の対立を激化させ、community のなかに階級的亀裂を生ぜしめるようになった。従来community においては、その成員に共同参加の感情、相互連帯の意識、共同行為の事実がその全体の社会的な福祉目的に対して極めて自然に有機的な組織化を行いやすい条件におかれていたが、今日では次第に共同体としての実質を失い、従って共同社会的な意識も薄らいできたために社会福祉的な目的のための有機的な組織化も困難になってきた。

(註1) R.M. MacIver: Community 1917 p.171

(註2) R.M. MacIver & C.H. Page: Society 1949 p.295

(註3) R.M. MacIver & C.H. Page: Ibid p.281

(註4) Wayne McMillen: Community Organization for Social Welfare
1945 pp.29. 30

次に **community** の概念には集団としての **community** 概念も考えられうる。性格を異にする多種多様な集団や社会圏をいずれも皆 **community** と呼んでいる場合がある。極めて小さい単純な未開人の集落や農民の村落から、極めて広大にして複雑な現代都市社会に至るまで、いずれも **community** という言葉で呼ばれている。また小さな家族集団や渡り職人のキャンプ生活 (**trailer camp**) から、大きな民族や世界まで皆 **community** と看做されている。

従って集団としての **community** の特質も種々雑多であり、自足的生活、共通の規範、共属の意識や一体感情、人口と社会施設や機能の地域的分布との相互依存関係、対面的接触、結合関係の累積性など、多くの標識によって **community** を捉えようとしている。多くの種類の **community** 集団が存在すると看做す考えは、MacIver の用法の如く、**association** と対比させている概念であるために、理論社会学の分野で多く用いられている。これに対して **community** を特殊な唯一の具体的集団形態と看做す立場は、農村社会学や都市社会学のような実証主義的社会学の立場において取扱われてきた。

前者の立場に立つ **community** は、共同生活の一範圍 (**any area of community life**) にその特質の重点がおかされているから、人間の共同生活の程度や強度によって各種の段階の **community** が存在するわけである。従って共同生活の範圍をどのような基準で地域的に境界づけるかが問題になってくる。人間共同生活の地域的範圍を極めて広くとるときには、共同生活体の結合力は弱くなるし、共同生活の結合力を強くするとその範圍は小さくなってくる。従って **community** は次元の異なるものが重層的に存在することになる。教育社会学の場合でも、最初は校区のような **local community** を考えていたが、今日では現実的な教育上の実際上の要求から解釈し直すようになって、地方的 (**regional**) 全国的 (**national**)、国際的 (**international**) な

community をその上に考えるようになってきた。

これに対して、後者の例である農村社会学や社会事業や公衆衛生の分野においては、特定の地域社会を community という考え方によって捉えてゆく傾向がある。一定の地域社会という community の場合には、日常生活上の基本的要求 (basic needs) をその内部でほぼ充足できる程度に各種の施設や制度 (services and institutions) を具備している地域が、その範囲として成立するのである。すなわち、それは生活機能の相互依存性も心理的な統一性も相当高度な状態にあると思われる地域社会集団として最小のものを指している。従ってこの場合には、生活がその内部において自足的である社会的完結性 (social completeness) という点に重点がおかれている。ここでいう自足的な社会的完結性 (self sufficing social completeness) というのは、なにも経済的に完全に自給自足をしている封鎖的な社会であるという意味でもなければ、文化的に閉ざされた包括的な自給圏を形成しているという意味でもなく、ただその地域内で日常生活が、殊に消費生活が、あまり不自由せずに営まれる最小程度地域社会を指しているのである。この意味では Davis のいう社会生活のすべての面を包含している最小の地域社会であると考えても差支えない。(註1)

以上の如く community という概念を類概念として考える場合と種概念として捉える場合の二つの立場が存在するのであるが、前者の場合は同一地域に居住し、かつ共住するが故に、そこに共通の関心をもつ社会が存在すると考えるのも、結局は一定地域上に共住し、社会資源の共同利用から我等意識 (we-feeling) が発生すると考える後者の立場と深い関連性をもっているのである。

(註1) K. Davis: Human Society 1949 p.312

community は人間のあらゆる social needs を充足させる幾多の機能を包容しているが、ある特定の interest を追求するために組成された機能社会ではない。MacIver によれば、community は単に人間の個々の利害関心による結びつき以上のものである。彼のいう利害という概念は、元来 community

を解明するために用いられたものであるというよりは、寧ろ **association** の形態や内容を解明する概念として使用したものであり、**community** の場合には、そのような具体的な個々の特殊な利害関心による結合ではなく、人間の生活全体にわたるさまざまな利害関心が存在している一定の地域を指しているのである。従って **community** という集団に課せられた独自の目的というものはないが、**community** の成員がもっているそれぞれの目的が同時に **community** の目的になっている。すなわち **community** はある目的のために特に意図的に形成されているものではないから、人はその目的によって **community** の成員となりうるのではない。地域社会の一員として、その土地に出生し、または移転してくることにより、当然その **community** に所属するようになる。それ自身としては機能社会ではないから、そのための独自の組織をもつのでなく、また組織によって始めて成立する組成社会でもない。従って **community** はその起源をもたないし、また生誕のときも持っていない、^(註1)と MacIver は述べているが、それにしても **community** が成立するためには、それに必要ないくつかの成立条件がある。そこで Cook によれば、**community** が成立するための必須条件として次の六つのものが挙げられている。^(註2)

(1) 人口集団 (**population aggregate**) であること。

community を構成している人口集団は一個の **community** として機能しうる十分な大きさをもつものでなければならない。またそれは一個の **community** として機能しうるような、同質的な人口集団でなければならない。**community** はこのようにその規模 (**size**) と構成 (**make up**) とにおいて、具体的な制限をもつ人口集団である。

(2) 隣接した地域 (**contiguous territory**) の住民から成ること。

community は一定の場所を占めていなければならないが、それは必ずしも府県郡村のような政治的、行政的な一定の区画内の地域とは限らない。**community** の領域や拮がりは固定的なものではなく、また人為的、形成的に定められた地域でもない。それは単なる地理学的区画ではなくて、共通の文化

と地方意識とを呈する地域 (an area revealing a common culture and a local consciousness) である。従って community の地域は、地図の上にその限界を画しうる。そして community はある一定の生活活動の中心をもち、その中心を核として結合し、それを中核として、その周辺に拡がっている地域社会である。

(3) 共通の経験 (common experience) で結びあわされている。

community の成員が、その地域社会の歴史の進展に際して、ある役割を演じ、またその演じた役割について自覚していて、そこから「自分たちの社会」という意識が生れ、この意識が紐帯となって社会的結合が成立している。地域社会は共通の文化と地方意識とを呈示する地域集団であるから、その運命の起伏をみずからのうちに感ずることによって、感情的、思想的、生活的に結合されていることをいうのである。

(4) 基本的な奉仕機関 (basic service institution) をもつこと。

地域社会はその住民の生活の場所であり、一定の生活活動圏であるから、それは欲望充足機関 (want-satisfying agencies) をもっているということを意味している。

(5) 地域的統一の意識をもっていること。

地域社会の成員が community spirit に満たされていること。一般に人びとが郷土感情や自己の所属する町村の名に特殊の愛情や感情を示すのは、この地方的統一意識のあらわれである。

(6) 一個の社会集団として行動しうる性質があること。

地域社会の存在が脅やかされた場合、その生存のために全体として一つの行動 (social action) をとりうるということを用いる。火事、洪水、地震などの天災地変、人口移動、社会変動などの経済的、政治的、社会的危機などに直面した場合、これに対処する能力を発揮して一丸となって行動することのできる統一体であることが必要である。

それでは community が成立する要件とは何であるか。いま一度更に掘り下げて検討してみよう。MacIver によれば、共同の社会的特徴がみられる共同生活の一定の地域を community というのであり、彼は共同生活の指標を

共同生活によって生ずる他の地域と区別されるような共同の社会的特徴に求めている。この場合、共同生活とは一定の地域と一緒に住んで、生活の種々の側面にわたって自由にお互いに接するということであり、それによって特性として明示される社会的特徴というのは、社会的類似性 (social likeness)、共同の社会的観念 (common social idea)、共同の慣習 (common custom)、共同の伝統 (common tradition)、共同感情 (the sense of belonging together) などである。(註3)

従ってこれらの諸特徴がみられる共同生活の一定の地域が問題にされる場合には、先ずそれが成立するに必要な要件として、第一に共同生活、第二に共同の土地が前提となっているのである。

(I) 共同生活 (common life, common living)

共同生活は **community** にとって欠くことのできない根本要素である。人間は古くから社会的動物だといわれているが、**community** はそこに人間のあらゆる種類と程度の社会的関係がみられ、あるいは生じる可能性のある領域である。(註4)

(イ) 共同生活の第一の標識は、そこに内包される成員の生活の自足性 (self-contained, self-sufficient) という基準にある。しかしそれは絶対的な意味のものではない。どんなに広大であり、かつ進化した現在の **community** であっても、それが絶対的な完全性における自足性を保つためには、人類世界という周域以外には存在しない。相対的な意味における自足性は、その **community** における成員の社会関係の親疎の程度に関連して成立するのである。従ってわれわれの周囲に同心円的に存在する多くの **community** は、その生活関係の範囲としての概念である。この意味において「**community** は程度の問題」(註5) である。

(ロ) 共同生活の第二の指標は、その社会資源の共同利用 (common uses of social resources) である。社会生活に必要な資源を共同で利用しうる便宜の提供が **community** に準備されており、地域社会の住民の基本的な必要 (common basic needs) がそこで充足されてゆくところに **community** の存在意義が成立するのである。

(イ) **community** の範囲はその成員の生活の自足性を基準とするだけでは未だ充分であるとはいえない。そこで次に **community** の領域をその成員の同質性に求め、その生活の基本条件の共有とその意識における類似性という基準を設定している。**community** の領域の大きさは個人の生活に相対的であるのではなく、その集団に対して決定される。従ってそれはその地域の構成員の多くのものにとって生活の全体がそこで営まれ、また営まれうる地域でなければならない。地域共同社会感情の一形態である特定の共同社会感情を起こさせるに足るだけの共同生活とその領域が、特定類型の **community** である。(註6)

MacIver は地域共同社会感情として、我等意識 (**we-feeling**)、役割意識 (**role-feeling**)、依存意識 (**depending feeling**) の他に、地域社会の民習と地域生活への関心との二つを指摘している。

(II) **community** の完結性と統一性

community は包括的な社会であるが、それ自体統一体であるから、そのうちに内包する部分社会を単位とする統一的ではない。**community** の実体は部分社会が構成要素をなすのではなく、かかる要素は完全なる個人 (**person**) である。個人は部分社会の成員として **community** に属するのではなく、**community** の成員として部分社会を組織するのである。従って **community** が最初に存在し、母体をなしていて、それが泡立って部分社会を生み出したのであるから、組成社会 (**association**) の形成分化は **community** の発展である。

(III) 土地の共同または場所 (**common earth, locality, territory, soil**)

community の第二の要件は共同の土地であり、土地は **community** に対して次の三つの意味をもっている。

(イ) 共同の土地は **community** 生成の機縁となっている。勿論 **community** の機縁は土地の外に血縁も認められる。

(ロ) 土地は単に集団形成の動因である許りでなく、地域社会にとって不可欠の要素である。土地は生産の母体である。MacIver によれば「人間が一つの所に投げ込まれると何処でも、人びとが切り離れて自分たち自身の方に向わねばならないときは何処でも、共同の場所ということを基礎として、共同の価値が

生じてくるし」(註7) また「地域社会感情は社会化の過程それ自身のうちに発達してくる。」(註8)

ㄱ) 土地や場所は環境的な作用を営む。人びとが密集する可能性は地理的条件によって影響を受ける。従って社会関係の推積も community の地域的形状と照応する。

以上述べてきたように、MacIver は community を共同生活の行われる一定の地域と規定し、それを捉らえる指標として地域と地域社会感情の二つを指摘した。従ってこの二つの要件を満たすものであれば、そのいずれもが community であると考えているのである。H.P. Fairchild の辞典では、community の規定として、その自給自足性、さらにはその感情や態度の総体などをその指標として挙げているが、MacIver は community の自給性を必要条件としていない点に特色がある。ところが MacIver は、community の特質として重視している地域共同社会感情の性質や基盤の問題を、人間が一つの場所に共住することによってとか、更には社会化の過程とかというように、極く一般的に論じているだけで、一定の社会構造との間の具体的な分析的視野から、具体的な調査研究の手引きや仮設や理論は示していないのである。

(註1) R.M. MacIver: The Elements of Social Science 2nd ed. 1922 p.9

(註2) L.A. Cook: Community Background of Education 1938 Part I.
Chap II pp.26~29

(註3) R.M. MacIver: The Elements of Social Science 1921 p.9

(註4) R.M. MacIver: Society, A Textbook of Sociology, 4th ed., 1940 p.9

(註5) R.M. MacIver: Community, A Sociological Study, 3rd ed., 1924
p.23.75

: The Elements of Social Science, 2nd ed., 1922 p8.106

(註6) R.M. MacIver & C.H. Page: Society, An Introductory Analysis,
1949 p.283

(註7) Ibid p.29

(註8) Ibid p.292

以上 **community** 概念を要約してみると、次の三点を指摘することができる。

(1) **community** 概念の不明確性

community という言葉の日本語訳が数多く、混乱を招いているのは、**community** 概念そのものが不明確であるということに由来している。すなわち一面では基礎社会や共同社会を意味するかと思えば、また他面では全体社会や綜合社会を表示している。基礎社会というのは派生社会（構成社会）を含んでいない部分社会である。^(註1) 従って充的な性質をもつ **community** と区別される。全体社会というのは、一切の社会的結合の綜合であり、「集団と社会連結」の、それ故に社会関係の総体である。従って関係にある人びとの具体的な社会というよりは、関係の綜合としての抽象的、観念的社会を意味している。^(註2)

(2) **community** 概念の多面性

communtiy という言葉の日本語訳が数多いということは、その概念が単に不明確であるというよりは、寧ろ **community** 概念のもつ性格が多面性を帯びていることに基因するものと考えられる。

(3) **community** 概念の具体性と抽象性

community は現実的な、具体的な、あるがままの完全な社会であって、思惟により抽出され、類型化されたものでないという立場と、具体的には把握されないが抽象的、論理的に理解される概念として捉える立場とがある。たとえば **solidality** と同義語に用いられている。^(註3) しかし実践的な分野と深いつながりをもつ学問の世界では、具体的に生きている社会として、全体的に把握する概念として用いられ、**community** の現実的な具体性を認めている。

(註1) 新明正道編：社会学辞典 p.161. 703

(註2) 向井利昌：全体社会の基礎構造

(註3) A.W. Small: General Sociology 1905 p.582

BIBLIOGRAPHY

- G.A. Hillery, Jr; Definition of Community: area of agreement
(Rural Sociology, 1955 Vol. 20 No. 2)
- R. König; Die Gemeinde im Blickfeld der Soziologie (Handbuck
der kommunalen Wissenschaft und Praxis, I Bd., Kommunale
Verfassung, hrsg. v. H. Peters)
- R. König; Einige Bemerkungen von der Soziologie der Gemeinde,
S. 10 (Soziologie der Gemeinde, Sonderheft der Kölner Zeits-
chrift für Soziologie und Sozialpsychologie).
- J. Ladd; The Concept of Community: a logical analysis (C.J.
Friedrich ed.; Community, 1959)

Memorandum on the Conception of Community

Résumé

The conception of community is multivocal. MacIver provides the conception of "community" making a pair of community and association, it has been defined as territorial conception in practical use. Many sociologists describe the conception of "community" as a type of idea, but it is difficult to search for its reality in only locality. The conception of "community" is indistinct, provides for both concrete and abstract elements. I think that CHIIKI KYODO SHAKAI is the exact equivalent for Japanese to "community", because it expresses its reality of "locality and common".